

離島の幼児教育における保小連携プログラムの実態

—新潟県粟島の保育園と小学校生活科が取り組む自然体験活動を事例に—

得居 千照

I. はじめに

子どもは遊ぶことから多くのことを学習する。幼児教育にとって遊ぶことは学習の中心であり、子どもの発達に欠かすことのできない活動である。中央教育審議会（2005）においても、幼児の自発的な活動としての遊びが重要な学習として位置づけられ、議論がなされている。また、原子（2016）は、子どもの遊びの発達上の意義を、①身体の発達、②感情の発達、③知的発達、④社会性の発達、と4つの側面があることを明らかにしている。

幼児期の遊びは、学校教育での学びを基礎づけるためにも重要な位置を占めていることが指摘されているが、幼児期から学童期への移行にあたり「小1プロブレム」の問題も明らかになっている。山口（2016）は、「小1プロブレム」の背景として、「家庭における子育て環境の変化などの社会的要因のほかに、幼稚園・保育所の学びと小学校の学びとの間の「段差」の存在」（p.344）を指摘している。

この学びの「段差」を減らし、連続的なものにするために注目されているのが、保幼小連携である。これまで、小1プロブレム予防アプローチは、小学校を中心に具体的な対処策が講じられるものが多かったとされる（福元，2014）。そこで本稿では、幼稚園・保育園を中心とした保幼小連携が如何に計画され、実施されているのか、幼児教育の視点からみた保幼小連携の実態に着目する。

本稿が事例とするのは、新潟県粟島浦村の粟島浦村保育園の保育士が、粟島浦小学校「生活科」の担当教員に呼び掛けて計画、実践がなされた保小連携プログラムである。このプログラムでは、粟島浦村保育園の園児と粟島浦小学校の1・2年生が一つの事を協力して行うため、小学校の裏の畑に、サツマイモの苗を植え、収穫までが行われている。

以上を踏まえ、本研究の目的を、離島の幼児教育の視点から保小連携プログラムの実態を明らかにすることとする。

そこで本稿では、以下の手順により検討を進める。第一に、保幼小連携がどのように展開されているのか、先行研究の概観により明らかにする(第Ⅱ章)。第二に、本稿で対象とする粟島浦村保育園で行われている保育の内容を粟島浦村保育園の保育課程、年間行事計画、日課表および参与観察によって得られた筆者のフィールドノーツを参考に明らかにする(第Ⅲ章)。第三に、粟島浦村保育園と粟島浦小学校「生活科」で取り組まれた保小連携プログラムの実態を明らかにする(第Ⅳ章)。以上の検討をもとに、離島の幼児教育における保小連携プログラムの可能性を示し、結論とする。

Ⅱ. 保幼小連携の展開

2017(平成29)年3月31日、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令が同時に改訂(定)され、3歳以上の子どもについて、「幼児教育の共通化」が図られた。ここでは、「育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に示されている。この背景には、「幼児教育と小学校教育との接続の問題を踏まえ、小学校入学時に、幼稚園、保育所、認定こども園のいずれから来た子どもも、一定の力を持っているよう「幼児教育の育つ力を明確化」したものである」(土井, 2018, p.96)とされる。

なぜ、幼児教育と小学校教育の接続を図る必要があるのか。ここには、「小1プログラム」の問題がある。「小1プログラム」は、1997年より新保真紀子らの研究を機に明らかとなってきた課題である。「小1プログラム」とは、「①授業不成立という現象を中心として、②学級が本来持っている学び・遊び・暮らしの機能が不全になっている、③小学1年生の集団未形成の問題」(新保, 2010, p.7)とされる。その要因として、以下、6つの項目が挙げられる。①子どもを取り巻く社会環境の変化が、子どもの育ちを変化させていること、②親の子育ての孤立化と未熟さ、③子どもも親も自尊心が低く、人間関係づくりが苦手であること、④就学前教育と学校教育の段差の拡大、⑤自己完結し、連携の少ない学校圏、⑥今の子どもにミスマッチの頑固な学校文化や学校教育システム、の6項目である。その上で、新保(2010)は、①～③は大きな社会的変化であるのに対し、「学校だけでできることと、家庭や地域と連携しないとできないことを仕分けて、学校改革していくことが大切」(新保, 2010, pp.10-11)であるとし、就学前教育と学校教育の学びの接続、保幼小連携の重要性を説いている。

また、小山(2008)も保幼小連携の意義を明らかにした上で、保幼小の教員の意識のズレとして、幼小の教育方法・学習形態などの違いを挙げている。さらに、保幼小連携を行う上で生じやすい課題として、①上向き指向・一方通行の関係性からの脱却、②地域性の崩壊による保幼小連携の難しさ、③保幼小連携のための時間の設定を挙げている。では、実際に、離島の幼児教育における保小連携はどのように行われているのか、以下、粟島浦村保育園と小学校生活科の連携を事例に明らかにする。

Ⅲ. 栗島浦村保育園の概要

ここでは、栗島浦村保育園の施設概要を、風土記編集委員会（1991）や栗島浦村保育園が含まれる保険福祉総合施設新築工事の際に用いられた平面図をもとに明らかにする。また、実際の保育内容や参与観察を通して明らかとなった栗島浦村保育園での1日の様子を、栗島浦村保育園の保育課程、年間行事計画、日課表などをもとに明らかにする。

1. 施設の概要

栗島浦村保育園は、新潟県栗島にある唯一の保育施設である。1956（昭和31）年3月に保育所として認可され、保育施設として運営が開始された。現在の栗島浦村保育園につながる保育所であるが、設立当初から現在の保育園と同じ場所に設置されていたわけではない。設立当初、保育所は総合庁舎とともに、内浦地区の漁業協同組合や観音寺、栗島浦小・中学校に近い、海岸沿いに建物があった。しかし、1974（昭和49）年3月22日から23日にかけての深夜に発生した海底地すべり災害によって、保育所も被害を受けている。以下は、風土記編集委員会（1991）による被害状況の記録である。

海岸沿いの陸地が延長480m、最大巾約60m、面積約2万㎡にわたり浸食された上、内浦港においても著しい海底地形の変化が生じ、水深3～4mあった所が災害後には10m～20mの深さになった。また災害後堆積土砂量20万㎡前後流出した。このため、深夜、一瞬のうちに防波堤、村道26号線の全面欠壊と共に、海岸沿いの鉄筋コンクリート2階建総合庁舎、保育所、舟小屋30棟流出、この外、多数の漁船やわかめの養殖枠や小型定置網も流出して、被害総額は約30億円にものぼった。幸い死傷者は出なかった。（風土記編集委員会，1991，pp.64-65）

以上の被害状況からも死傷者が出なかったことがわかる。風土記編集委員会（1991）によると1974年3月22日の23時30分ごろ、総合庁舎が傾き、その後、3月23日0時10分ごろには、保育所の南側が沈下、1時ごろには保育所が半分倒壊したことがわかる。その後、保育所は1975（昭和50）年3月に内浦保育所として現在の栗島へき地出張診療所のあるあたりに建物を移動し、保育施設として再開された。内浦保育所から栗島浦村保育園になったのは、2002（平成14）年4月のことである。

栗島浦村保育園は、栗島浦村通所介護センターと栗島へき地出張診療所と廊下でつながっており、園児の給食が作られる調理台は、栗島浦村通所介護センターと共有である。保育園には、乳児室（10か月～2歳未満）、保育室（2歳以上～3歳未満）、保育室（3歳以上～4歳未満）、保育室（4歳以上）の4部屋ある。その他、室内遊戯室や職員室、物置やトイレが設置されている。

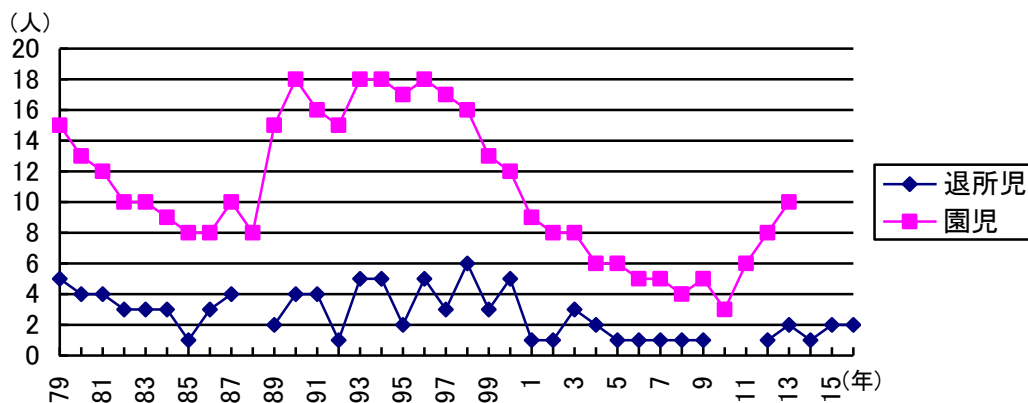
2017（平成 29）年 9 月現在、粟島浦村保育園の園児は、11 名である。第 1 表は、2017 年度粟島浦村保育園の園児の内訳である。また、第 1 図は、内浦保育所のとときから記録がなされている退所児の人数と園児の人数の推移をまとめたものである。1989 年ごろから園児の人数が増加していることがわかる。その後、2000 年ごろより減少。2017 年は第 1 表の通り 11 名であることから、園児の数が少し増加している様子がわかる。また、退所児は、途中で引っ越してしまった園児と卒園児を含む人数であるが、園児数と比例しており、近年では 1～2 名である。

筆者は、2017（平成 29）年 9 月 4～6 日の 3 日間、粟島浦村保育園で参与観察を行い、実際にどのような保育が行われているのか、調査を行った。適宜、フィールドノートを作成した。また、保護者への事前調査として質問紙調査を行い、保育士へは聞き取り調査を実施した。以下に示す粟島浦村保育園の保育内容や 1 日の様子、さらに、保育園と小学校生活科が取り組む自然体験活動の実態は、筆者が行った参与観察で得たフィールドノートの記述や月に 1 回、保育士から保護者に向けて保育園での取り組みや 1 か月のスケジュールなどの連絡事項が記載された保育園だよりなどの資料をもとに明らかにする。

第 1 表 2017 年度粟島浦村保育園園児の内訳

年齢	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
人数	1 人	4 人	1 人	1 人	2 人	2 人

(筆者作成)



第 1 図 粟島浦村保育園の退所児と園児数の推移
(内浦保育所退所児台帳，園児数をもとに筆者作成)

1. 栗島浦村保育園の保育内容

では、本稿が事例として取り上げる栗島浦村保育園ではどのような保育が実践されているのか。ここでは、栗島浦村保育園の年間行事計画、保育課程、日課表および筆者のフィールドノーツを参考に、保育内容を明らかにしていく。

栗島浦村保育園の年間行事計画は、第2表、保育課程の一覧が第3表である。保育内容はそれぞれ年齢ごとに分けられており、養護と教育の二つの側面から行われている。「保護者・地域」のとの関わりについては、「地域行事に保護者と共に参加し、子育てに対する地域全体の支援を確保する」とあるが、第2表に示した年間行事計画にある通り「村民運動会」では踊りや親子レースに参加していることがわかる。また、月2回行われている介護予防事業「イキイキ体操」では、お年寄りの方とともにゲームを行うなどの交流が行われている（写真1）。学校連携についても保育課程に位置づけられ「児童生徒と園児とが交流できる機会をもうけ、逆に園児が学校行事にも参加する」とある。年間行事計画にある学校運動会へは、幼児レースに保護者と参加しており、保小連携プログラムだけでなく交流が行われていることがわかる。



写真1 イキイキ体操での交流
(2017年9月6日 筆者撮影)

第2表 2017年度栗島浦村保育園年間行事計画

月	行事
4月	入園式
5月	島開き、子どもの日、母の日、親子遠足、保育参観日
6月	父の日
8月	七夕流し、夏休み
9月	親子遠足、学校運動会、祖父母給食会、保育参観日
10月	村民運動会、保護者給食会、八所神社祭礼
11月	文化祭
12月	おゆうぎ会、クリスマス会、冬休み
2月	節分、保育参観日
3月	ひなまつり、卒園ランチ、卒園式

(2017年度栗島浦村保育園年間行事をもとに筆者作成)

第3表 栗島浦村保育園保育課程

保育理念	一人ひとりを大切にしながら保育園と保育園および地域と協力していき子どもたちの成長・発達を図る	
保育方針	子どもたち一人ひとりの家庭環境、発育環境に配慮して、個性を尊重し創造力を豊かにする保育を行う	
保育目標	健康で明るく活動する子ども、自然と親しむ心豊かな子ども、自立性と協調性を持つ子ども	
発達過程	1歳～：言葉の習得、歩行の確保	
	2歳～：排泄を自分でする、友だちへの関心を持つ	
	3歳～：生活習慣を身につけ、自分の思いを言葉で表現できるようにする	
	4歳～：命の大切さを認識し、集団行動が出来るようになる	
	5歳～：就学に向けての準備をする	
保育内容	養護	教育
	1歳～：睡眠等の適切な休息を取らせる	言葉を発せられるようにする
	2歳～：集団生活の緊張を和らげる	人や動物の模倣ができるようにする
	3歳～：動植物に触れ合う機会をもたせる	絵本や視聴覚教材で楽しめるようにする
	4歳～：生き物に対して愛情を持たせる	身の回りのことに関心を持てるようにする
5歳～：生活のリズムを整え就学に備えさせる	自分の気持ちを表現できるようにする	
健康管理	健康診断、発育測定等により、発育状況について把握し、異常が認められたときにはすぐに対応する	
環境・衛生管理	設備の維持管理、清掃等の徹底により子どもたちに衛生的な園環境を提供する	
安全対策	毎月の避難訓練の実施、危機管理マニュアルの整備により、万が一に備える	
保護者・地域	地域行事に保護者と共に参加し、子育てに対する地域全体の支援を確保する	
給食管理	安心安全は食の提供に努める	
研修	保育士が研修に参加し、研鑽を積めるようにする	
学校連携	児童生徒と園児とが交流できる機会をもうけ、逆に園児が学校行事にも参加する	
評価	保育士は毎月1回の自己評価を通じて、技量向上を目指す	

(2017年度栗島浦村保育園保育課程をもとに筆者作成)

2. 栗島浦村保育園に通う園児の一日

ここではまず、事前調査として、栗島浦村保育園に子どもを通わせている保護者を対象に行った質問紙への回答から、栗島浦村保育園の園児がどのような遊びや自然との触れ合いを行っているのかを明らかにしたい。質問紙調査は、栗島浦村保育園に子どもを通わせているすべての保護者を対象に行った。1名の保護者より回答を得ることができた。園児の全体的な傾向を把握することにはつながらないが、ここでは、得られた回答を参考に、園児の保育園以外での様子を明らかにする。

回答を得ることができたのは、30歳代の母親からである。栗島での居住歴は3年以上であり、1歳の子どもがいる。ここでは、回答を得ることができた母親の園児を園児Aとし、質問紙の結果を明らかにする。園児Aは、栗島浦村保育園から帰って来ると、遊びやお風呂に入り、18時ごろから夕食をとり、その後遊び、21時ごろに就寝するのが1日の生活のスケジュールである。「どのような遊びをすることが多いですか」という質問項目については「うた・踊り・散歩・TV・絵本・おえかき・ままごと・親との手遊びや体を使った遊び」というように、家の中で遊ぶことができる遊びを行っていることが多い様子がうかがえる。これに対し「生活や遊びに関して、意識的に取り組ませていることはありますか」という質問項目については「自分でできそうなことはチャレンジさせる。できる限り体を使って外で遊ぶ」との回答があるように、極力、外で体を使って遊ぶことを志していることがわかる。

また、自然との触れ合いについて聞いた「自然と触れ合う機会はどのような場面がありますか」という質問項目については「公園で花をみつける、海の魚を上から見る、公園の土や砂で遊ぶ」という回答があった。「自然の中でお子さんはどのような反応を示すことが多いですか」とについては「わぁー・おはなー・おさかないたー・ピンクー！むらさきー！と嬉しそうです」という回答があり、目で見た情報を言葉にしなが、関心を示している様子がわかる。

では、栗島浦村保育園で園児はどのような1日を過ごしているのだろうか。第4表は、栗島浦村保育園の日課表である。基本的には、第4表にある日課表の通り保育が行われているが、その日の天候や園児の様子などを考慮し、保育士同士で相談をしながら、実際の保育が行われている。第5表は、筆者の調査期間中の保育園での保育の概要である。以下、フィールドノーツの記述をもとに栗島浦村保育園において実践されている保育の様子を明らかにする。

栗島浦村保育園の1日は、第4表の保育日課表にあるスケジュールで進められる。園児は、8時30分より順次登園、身支度を済ませ、室内遊びを行う。写真2は、保育士が段ボールを用いて作ったゲームで遊ぶ園児の様子である。栗島浦村保育園では、異年齢保育が行われており、1歳から5歳までの園児と一緒に過ごしている。ストラックアウトについても、異年齢の園児たちがそれぞれ遊べるように、穴の位置や遊び

方などが工夫されている。その後、朝の会を行い、歌を歌う。10時ごろからは自由遊びを行う。季節により散歩や野外遊びを行う。ここでは、さまざまな遊びや経験を通して、異年齢での関わりを深めることがねらいとして設定されている。

第4表 保育日課表

時間	内容
8:30～	順次登園、身支度、室内遊び(写真2)、片付け、排泄
9:30～9:45	お集まり、朝の歌、季節の歌を歌う
10:00～	おやつ(未満児)、自由遊び(3歳以上児)(写真3)
11:30～	手洗い、排泄、給食準備、給食
12:40～	午睡準備、排泄、歯磨き、フッ素(3歳以上児)
13:00～	絵本、午睡
15:00	目覚め
15:15	おやつ
16:00～17:00	順次降園、延長保育

(2017年度栗島浦村保育園保育日課表をもとに筆者作成)

第5表 調査期間中の栗島浦村保育園での保育の概要

	9月4日(月)	9月5日(火)	9月6日(水)
8:30～	順次登園	順次登園/飛行機遊び、ぬり絵	順次登園/オセロ、鉛筆立て、おままごと
9:30～	朝の会、自己紹介	朝の会	朝の会
10:00～	おやつ 自由遊び(スカットボールからゴルフになりましたゲーム) 11:10～園庭遊び	おやつ リトミック イキイキ体操のメダル作り 10:40～学校の裏の畑の様子を見に散歩	おやつ 10:15～漁火温泉おと姫の湯へ向け出発 10:20～イキイキ体操 誕生日会、歌、言葉遊び
11:30～	給食	給食(12:30～)	給食
12:40～	午睡	午睡(13:00～)	午睡
15:00～	目覚め	目覚め	目覚め
15:15～	おやつ	おやつ	おやつ
16:00～	順次降園	順次降園	順次降園

(フィールドノーツの記述をもとに筆者作成)

写真2や写真3からもわかる通り、栗島浦村保育園では「はだし保育」が行われている。そのねらいとして「血行がよくなる・右脳が刺激される・創造力や直観力が高まる・足の裏が刺激され、脳の発達を促す」（「わくわく」7月号）ことが挙げられている。そのため、朝の会や室内遊び、リトミックなど、足に怪我がある場合などを除きはだしで夏の期間を過ごしている。

写真4は、9月4日に行った園庭遊びの様子である。栗島浦村保育園の園庭には、砂場や滑り台、ジャングルジムがあるだけでなく、役場の職員と園児で植えたナラの木があるなど、植物と触れ合える工夫がなされている。また、写真5は、小・中学校裏の畑へ散歩をした際に、栗島で唯一の信号機を渡る園児の様子である。異年齢保育であるため、散歩の際も保育士はさまざまな準備や配慮を行っていた。



写真2 朝の室内遊びの様子
(2017年9月4日 筆者撮影)



写真3 リトミックを行う様子
(2017年9月5日 筆者撮影)



写真4 園庭で虫を探す様子
(2017年9月4日 筆者撮影)



写真5 散歩の様子
(2017年9月5日 筆者撮影)

IV. 保育園と小学校生活科が取り組む 自然体験活動

では、新潟県粟島における保小連携はどのような取り組みがなされているのだろうか。ここでは、月に1回、保育士から保護者に向けて保育園での取り組みや1か月のスケジュールなどの連絡事項が記載された保育園だより「わくわく」（平成28年度）と「あおぞら」（平成29年度）や保護者へのお知らせの手紙に記述された内容を手がかりに実態を明らかにする。



写真6 小・中学校裏のサツマイモの畑
(2017年9月5日 筆者撮影)

1. 新潟県粟島における保小連携の実態

粟島浦村保育園と粟島浦小学校生活科との保小連携プログラムは、2016年度に始められた。2016年5月23日の保護者への手紙「第一回 畑作業について」には、以下、4つのねらいが示されている。①園児に土いじりを体験してもらいたい、②自分で作って収穫を体験してもらいたい、③収穫したものを栄養士と考えて、食育につなげたい、④保育園から小学校にあがる時の接点にしたい、の4点である。畑は、地域住民の方が貸してくださった畑である。畑は、粟島浦小・中学校のグラウンドの隣にあり、地域住民の方々が、それぞれの畑を作っている。2016年度は100本の苗が植えられたが、2017年度は50本の苗が植えられた（「あおぞら」5月号）。土起こしや畝づくりも地域住民の方の協力により行われた。2016年6月号の保育園だより「わくわく」には、保小連携プログラム初日の様子が保育士により次のように記述されている。

5/25 小学1・2年生との連携プログラムで学校裏の畑にサツマイモの苗“べにあずま”を植えて来ました。

当日は、小学生一名、園児一名の欠席がありましたが、顔見知りとはいえ、自己紹介から始めました。

パラパラ振っていた雨が畑に行くと少し強くなり、小学校の先生（1・2年性担当）に植え方を教わりながら、一人一本植えて残念ながら退散。。それでも子ども達は「これ僕が植えた！」「おいしいおイモできるかな？」と嬉しそうでした。（残りの苗は職員が植えました。）

お時間のある時に子どもと畑を見に行ってみてください。

おいしいおイモができますように！！

「わくわく」の記述からもわかる通り、小学1・2年生は、栗島浦村保育園の卒園児であり、3月まで一緒に遊んでいた仲間である。保育士は、土いじりをさせたいという想いだけでなく、卒園児と園児をつなぐ機会として保小連携プログラムを計画している。秋の収穫までの間、園児と小学1・2年生は日程を調整し、草取りや水やりが行われている。保育園が発行した連絡の記録からは、サツマイモの畑の草取りや水やりを行ったあと、学校のグラウンドで水遊びや追いかけっこ、チョウやトンボを手や網で捕まえる園児と小学1・2年生の様子がうかがえる。共同の畑を持ち、ともにサツマイモを育てるといった体験があることは、栗小フェスティバルや運動会などの機会に小学校を訪れることとはまた別の経験を園児にもたらしめていると考えられる。

5月にサツマイモを植え、夏に草取りや水やりを行った園児と小学1・2年生は、2016年9月にサツマイモの収穫を行っている。以下の記述は、2016年の「わくわく」10月号に保育士が記したサツマイモの収穫当日の様子である。

9/27(火) 保小連携プログラムとして今年取り組んだ、サツマイモ(べにあずま)の収穫を行いました。(ご準備ありがとうございました。)

前日に予定していたものの、雨で断念。当日も曇りからいつ雨が降ってくるか…という心配がありましたが、5畝中2畝(約40本)を園児・小学1・2年生が協力して掘り上げました。

想像以上に深いところにイモがありましたが、子ども達は小さな手でがんばって土を掘っていました。大きいイモや長いイモを見つける度に歓声が上がりました。学校で量ってもらったところ、36kgだったそうです。

残り3畝も後日、学校と日程調整をして掘る予定です。決まり次第、着替えの準備等依頼したいと思います。また、収穫したイモについても検討いたします。

「わくわく」10月号の記述によると、園児と小学1・2年生は、大小さまざまな大きさのサツマイモをそれぞれ収穫したことがわかる。収穫したサツマイモをどのように扱うのかについて、10号の記述では、未定であることがわかるが、学校の多目的室でサツマイモを寝かせたあと、調理などはせずに、持ち帰り、2016年度の保小連携プログラムが終えられている。

2. 保育士が捉える保小連携の意義

ここまで、保育園と小学校生活科が取り組む自然体験活動の様子を保育園だよりに見る保育士の記述をもとに明らかにしてきた。では、保育士は実際に保小連携を行う上でどのような点に意義を見出しているのか。ここでは、栗島浦村保育園で働く3名の保育士への聞き取り調査の結果を手がかりに、保育士が捉える保小連携の意義を明らかにする。

聞き取り調査は、2017年9月4日と5日の給食が終わり、園児が午睡を行っている時間に空いている保育室を利用し実施した。一人あたりの聞き取り調査の時間は、30分から1時間程度である。あらかじめ設定した質問項目だけでなく、調査対象者とのやりとりの中で、随時聞き取りが行えるよう、半構造化インタビューの形で行った。ここでは、聞き取り調査の結果をもとに分析をおこなう。分析に際し用いるプロトコルは、相槌や意味のない繰り返しなどを省略した形で、全体の発話から一部を抜き出し、提示する。第6表は、調査対象者の基本的属性をまとめたものである。

保育士Aは、就職とともに栗島での居住を開始しており、内浦保育所での勤務経験がある。保育士Bは、東京都内での保育経験がある保育士である。栗島浦村保育園で3園目であり、保育園での勤務とともに居住を開始している。保育士Cは、保育士経験および栗島での居住歴が1年未満の保育士である。

聞き取り調査では、次の3つの質問項目を立てて、半構造化インタビューを行った。一つ目は、異年齢保育を行う際に気を付けている点についてである。栗島浦村保育園は、園児の数および保育士の数が少ないこともあり、他の年齢との関わりを積極的に持つことができる異年齢保育が行われている。二つ目は、栗島における自然体験活動についてである。三つ目は、保小連携についてである。ここでは、特に保小連携について保育士がどのように捉えているのかを中心に、聞き取り調査の結果を分析する。

第6表 調査対象者一覧

	保育士A	保育士B	保育士C
保育士経験	15年以上	栗島で3園目	1年未満
栗島での勤務歴	15年以上	3年	1年未満
栗島での居住歴	15年以上	3年	1年未満
年齢	30代	30代	30代
性別	女性	男性	女性

(聞き取り調査をもとに筆者作成)

保育士A：昔は、園の周りにちょっとした畑があって、サツマイモだとかひまわりとかコスモスが自然とあった。けれど、今は砂場とプランターがあるぐらいで、畑をやりたいというのがあって。保育園の周りにも畑がないので、どうしようかと思っていたら、学校の裏で課して下さる方がいて、土に触れさせたいかと思ってたから、サツマイモの苗を一緒に植えて。1・2回草取りや水やりをやって、収穫したんですけど、最終的にはクッキングまでいきたいんですけど、やっぱり小さい子多いので、学校の方も授業があって、かち合うのが難しくて。

まず、保育士Aが捉える保小連携プログラムについてである。保育士Aは栗島浦村保育園での勤続年数も長いため、これまでの保育園の様子を語っている。以前は、自然との触れ合いとして、一人一鉢用意し、ひまわりの種を植えたり、園の入り口に朝顔の種まいて、朝顔のつるをはわせるほか、ミニトマトやナス、オクラなどをプランターで育てることができるようなものに取り組んでいたという。そこには、畑で作物を育て、土に触れること、その先にある食育までつなげたいという保育士Aの思いが見られる。

保育士B：土いじりは子どもは好きだし、楽しいからいいと思います。ただ、意識を持って、お芋を植えて、出てきたら大きくなったら食べれるんだ一っというところまで至ってないのかな。土に触れたり、雑草抜いたり、それが楽しいっていうぐらいで。ただ一応は、お芋植えたら、こうなるんだよ、とか。去年もやったよね一とか。そのときどうなった？という風にいろいろと想像を掻き立ててはいたんですけどね。ただ、土いじってるって感覚ぐらいなのかなと思うけれど、これはすごい大切だなんて思います。

次に、栗島浦村保育園だけでなく、他の園での保育の経験がある保育士Bが捉える保小連携プログラムである。保育士Bは、年長組を担当していることから異年齢保育における遊びの工夫の術を多く見付けており、サツマイモの取り組みについても、園児がどこまでの認識をもって自然体験活動を行っているのかに着目している語りをみることができる。その際、園児に対して「去年もやったよね」「そのときどうだった？」などという問いかけにより、園児の創造力を引き出す工夫を行っていることが分かる。

保育士C：サツマイモを作るという過程が、たとえば春からあって、10月収穫になると思うんですけど。たぶん長期にわたると思うので。そういうプロセスというか、段階を経て、こういうのがこういう風になるんだっていう。こういうことって、学校に入ってから大事だと思うんで。継続してなにかをやるとか。なにかが始まったら、なにかが終わっていく、みたいな。

最後に、保育士Cが捉える保小連携プログラムである。保育士Cは、栗島浦村保育園が初めての保育園での勤務であり、保育経験が少ない保育士である。しかし、保小連携に関しては、継続性に着目し、サツマイモの取り組みの意義を見出していることがわかる。保育士Cは、保育園での学びと小学校での学びには教育するという面の違いがあることを指摘しながらも、サツマイモを植える経験が、プロセスや段階を学ぶ良いきっかけになっているのではないかと捉えている。

V. おわりに

本稿の目的は、離島の幼児教育の視点から保小連携プログラムの実態を明らかにすることであった。最後に、小山（2008）が示した保幼小連携を考える上での3つの課題、すなわち、①上向き指向・一方通行の関係性からの脱却、②地域性の崩壊による保幼小連携の難しさ、③保幼小連携のための時間の設定の観点から、栗島浦村保育園と栗島浦小学校生活科が取り組む自然体験活動を通じた保小連携プログラムを考察し、離島の幼児教育における保小連携プログラムの可能性を示したい。

まず、「上向き指向・一方通行の関係性からの脱却」についてである。小山（2008）は、これまで、さまざまな学校間での連携を考える際、上から下への強い要求をしがちであり、また、保幼小連携の問題は保育所、保育園、幼稚園の問題であるという一方通行の関係性が存在すると指摘している。本稿で取り上げた、保小連携の在り方は、これまで小学校から、幼児レースやなわとび大会の見学、栗小フェスティバルへの参加は呼びかけられることはあるが、保育園側からの取り組みがなかった背景を考えたときに、双方向からの保小連携の可能性が拓かれた取り組みであると言える。

次に、「地域性の崩壊による保幼小連携の難しさ」についてである。栗島には、保育園と小学校が1つずつしかなく、地域住民との関係も密である。そのことは、本稿が取り上げた保小連携プログラムが地域住民の畑の提供や畝づくりの協力など、地域住民の声をきっかけに動き出したことからとも言える。

最後に、「保幼小連携のための時間の設定」についてである。これまで、栗島浦村保育園と小学校は、卒園児の状況を確認するため年に2回の職員同士の会議が設定されてきた。今後、教員同士での連携とともに子ども同士の関わりを重視した、サツマイモの取り組みを生活科のカリキュラムへ導入していくかについては、課題が残る。今後、如何に保小連携の学びをカリキュラムの中に位置づけていくのか課題である。しかし、得居（2017）からも明らかなように「野菜を育てる」学習は生活科の中に十分に位置づけることができる取り組みである。

本稿では、離島の幼児教育の視点から保小連携プログラムの実態を明らかにすることを通して、保幼小連携の重要性が注目される中、連携のために関係をつなぐのではなく、保育士の思いから始まる保小連携の在り方を提示することにつながった。

謝辞

本研究では、栗島浦村教育委員会の皆様をはじめ、栗島浦村保育園の園児の皆様、保護者の皆様、そして、栗島浦村保育園の先生方に大変お世話になりました。突然の訪問にも関わらず、快く保育の現場を観察させていただき、貴重なお話をたくさん聞かせてくださいました。学ぶことが多く、かけがえのない経験となったのは、皆様のおかげです。心より御礼申し上げます。

文献

- 厚生労働省（2017）：『保育所保育指針（平成29年告示）』，フレーベル館。
- 新保真紀子（2010）：『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム～就学前教育と学校教育の学びをつなぐ～』，明治図書。
- 小山優子（2009）：保幼小連携実践の意義と課題．島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要，**47**，pp.9-16.
- 中央教育審議会（2005）：子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—（答申），文部科学省。
- 得居千照（2017）：生活科における地域と連携した環境教育カリキュラムの構想—新潟県粟島での子どもの自然体験活動を手がかりに—．地域と教育，**16**，pp.58-74.
- 土井晶子（2018）：保育内容「環境」と小学校教育課程につながる保育者養成授業プログラムの検討（1）～子どもの数量・図形、文字等への関心・感覚～．共栄大学教育学部研究紀要，**2**，pp.95-108.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』，フレーベル館。
- 原子純（2016）：次世代へつながる子どもの遊び—子どもの人間形成と環境—．尚美学園大学，尚美学園大学総合政策研究紀要，**27**，pp.133-149.
- 福元真由美（2014）：幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ—．教育学研究，**81**（4），pp.396-407.
- 風土記編集委員会（1991）：『あわしま風土記—三訂版—』，栗島浦村教育委員会。
- 文部科学省（2017）：『幼稚園教育要領（平成29年告示）』フレーベル館。
- 山口美和（2016）：幼保小連携における「接続期カリキュラム」の意義と課題．長野県短期大学紀要，**70**，pp.155-167.